

中学校 国語科における評価

—「絶対評価」が導入されて—

矢原豊祥

0. はじめに

平成十四年度より、「絶対評価（目標に準拠した評価）」が導入された。忠海中学校は、平成十三・十四年度は広島県基礎学力定着研究校として、そして平成十五・十六年度は学力向上フロンティアスクールとして学力向上に全校で取り組んでいる。そのような中で、本校では平成十三年度より「絶対評価」導入の準備を進めていたが、実施していく中でいくつかの課題が明らかになってきた。それに対して取り組んできたことについて、ここで総括してみたい。

また、国語科の授業において、「絶対評価」の導入がどのように授業づくりに効果をもたらしているかという現状を明らかにしたい。

1. 「絶対評価」導入にあたっての忠海中学校の課題

昨年度から本校で行ってきた校内研修を中心に、取り組みの経過の中であがってきた課題を挙げると次のようになる。

2. 忠海中学校の課題に関わっての具体的なとりくみ

(1) について

参考資料「新しい時代の学力づくり・授業づくり」(文部科学省教科調査官：平田和人)をもとに、校内研修を行い、全教職員の共通認識を確立していった。

- (1) 「絶対評価」と「相対評価」の違いを理解し、これまでの評価に固執しないよう、教職員の意識改革をしなければならない。
- (2) 評価の仕方が変わることに対し、保護者・生徒に説明を行い、学校のアカウンタビリティを果たさなければならない。
- (3) 本校で行った評価が、他校でも通用する評価であることをめざし、マネージメントサイクルを導入して、絶えず評価の改善を行わなければならない。

①絶対評価では、指導目標を立てないことには評価は成立しない。

↓シラバスの作成を行った。

②達成目標は、指導目標に対応する正答率をもって定義し、この線引きが達成目標の設定になる。

↓各教科、各評価場面においての評価基準の設定を行っている。

③テストの各設問は、指導目標の何を評価するものか、何の観点を評価しているのか明確にしなければならぬ

↓テストの各設問に

「観点別項目」などを明記。

④総合問題(例Ⅱ文章をもとに「文法問題」「語彙問題」「和文問題」「内容理解問題」などで構成)を作成し、この総合問題全体で何点、または何%とれたかを出しても、その数字から各観点別評価、指導目標別評価は出てこないのが無意味である。(↓⑧「ごった煮採点」も

	相対評価	絶対評価
1	指導目標は成立	指導目標は必須
2	達成目標は不要	達成目標は必須
3	リスニングテストの明確化は不要	リスニングテストの明確化が必要
4	総合問題でも可	総合問題は不可
5	間接的測定も可	直接的測定が必要
6	信頼性の問題は表面化せず	高い信頼性が必要
7	テストの合計点が必要	テストの合計点は不要
8	「ごった煮採点」でも可	「ごった煮採点」は無意味
9	評価の柱はテストのみで可	評価は複眼化
10	説明責任は軽	説明責任は重

同様で、正答率、合計点を出すのなら、各小設問毎に、何の観点か何の指導目標かで分けて採点しないと意味がない)

⑤「何がどれくらいできるか」をより正確にはからないといけない。↓英語の発音の評価をするのに、「紙と鉛筆の間接的評価」では、実際に発音していないので「発音の評価」としての客観性が低い。ペーパーテストは万能ではない。スピーキングテストの実施、実技テストの実施。(↓⑨評価の複眼化)

⑥評価項目に対して、本当に力がついたか判断するので、その評価方法に高い信頼性が必要とされる。↓様々な角度からの測定(↓⑨評価の複眼化)

⑦合計点というのは、他者との比較において役だったが、絶対評価には意味をなさない。↓観点別正答率又は得点、指導目標別正答率又は得点の表示の実施。100点満点の必要性もない。

⑧ごった煮採点(↓④参照)

⑨ある評価を行うときにペーパーテストがその評価の測定をするのに一番適しているなら、ペーパーテストを使う。

指導項目によっては実技テストや日頃の授業内での学習過程の評価(形成的評価)がその評価項目の大きなウエイトを占める場合もある。↓単純に定期テストが評価の大きなウエイトを占めると考えてはならない。(↓⑤、

⑥も参照)

⑩ 評価場面、評価結果など「それが何を意味するのか」などについて説明を求められたとき、評価をした者は、全ての人に対して説明責任をもつ。↓全教科評価総括表、保護者説明会、懇談での評価の説明の実施

（その他の「絶対評価」実施に関わつての校内確認事項）

① 評価のためのたくさんのデータが必要。評価計画が必要

② 各評価場面での評価基準を作成

③ 観点別比率は各観点同率にし、校内全教科統一する。（教科任せにしない）

④ 「絶対評価はいい点がつく」などというような誤った認識を捨て、より教科指導の責任と学校の責任が重くなつたこと、「評価」は「教師の授業の評価」としてとらえ、授業の工夫改善につなげていくこと（指導と評価一体化の推進）。

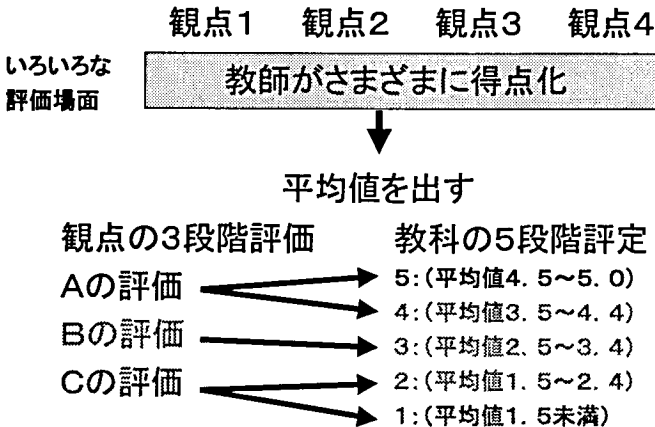
⑤ 各観点別評価から教科評定を出すシステムを校内で統一する。（教科任せにしない）

正答率	90%以上	5
	80%以上	4
	60%以上	3
	30%以上	2
	30%未満	1

▲満点がある評価（定期テストなど）の校内評価基準（カッティングポイント）（表1）

教科評定を出す校内システム（表2）

通知表の評価がされるまで



例：第2学年国語科第1学期評価総括表

	国語に対する 関心・意欲・態度	話す・聞く 能力	書く 能力	読む 能力	言語に対する 知識・理解・技能
定期テスト	※	※	※	※	※
中間テスト	※	※	※	※	※
学習ノート	※		※	※	
漢字字帳200	※				
ファイル・提出物 学習態度	※				
ポスターセッション 発表など		※			
漢字テスト					※
観点別評価 の出し方	上記の※のついでに5つの部門で出された評価をもとに、A、B、Cを決定します。	上記の※のついでに3つの部門で出された評価をもとに、A、B、Cを決定します。	上記の※のついでに3つの部門で出された評価をもとに、A、B、Cを決定します。	上記の※のついでに3つの部門で出された評価をもとに、A、B、Cを決定します。	上記の※のついでに3つの部門で出された評価をもとに、A、B、Cを決定します。
観点別比率（％）	20%	20%	20%	20%	20%

(2) について
「絶対評価」から「絶対評価」に変わることを受け、その主旨やどのようなシステムで評価が行われるかを保護者、生徒に説明した。

① 4月の保護者会において「学校教育説明会」を実施。

「教育内容」「各教科の観点と評価方法・評価場面」などの内容を説明。

② 7月の保護者会において、評価総括表をもとに個別に評価システムを説明。

③ 各授業で生徒に評価の仕方を説明。

▲例 評価総括表

(3) について

〈評価の信頼性を高めるマネージメントサイクルの実施〉
【平成十四年度の場合】

PLAN

4月研修委員会を中心に「絶対評価」の研修、校内基準、評価方法指針を立案し、校内研修で全員の共通理解を図った。

DO

1学期の実践。「絶対評価」初実施

CHECK

学期終了後、各教科から評価に関わった疑問、問題点を提出。研修委員会で検討・整理、課題に対する具体的改善案の立案。8月に校内研修において問題点の整理及び研修

ACTION

2学期からの評価を実施

評価を明確にした国語科における実践例 ～単元「ポスターセッション」(中学校2年)の場合～

(1) 単元の目標

個々の学習者の興味・関心に応じて、自由な発想でポスターを作成し、その意図や内容を聞き手的確に説明する力と、正確に聞き取る力を身につけさせる。また、調べたことについて話し合ったり、交換することで、お互いの認識、理解を深めることができる。

学習指導要領	「A 話すこと・聞くこと ア、イ、ウ、エ」「B 書くこと イ、エ」
関連領域	「言語事項」(1)オ「国語への関心・意欲・態度」

(2) 単元の評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	ウ 書く能力	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
①広い範囲から話題を求め、表現を工夫して話そうとしたり相手の立場や考えを尊重して的確に聞き取ろうとしている。	①ポスターを工夫して作成するとともに、聞き手を意識しながら説明し、それをもとに交換している。 ②自らの表現をとらえ直し時、相手の表現と工夫を整理している。	①自分の考えや気持ち的確に表すために、適切な構文を選んでいく。	①様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身につけている。	①説明をするとき、多様な表現様式や展開、文の成分の順序などについて考えながら話したり聞いたりしている。

(3) 単元の指導計画(全7時間)

次時	学習活動	評価の観点				評価方法
		関	聞	書	読	
I 1	・ポスターセッションの手順を理解し、調べる内容を決め、グループをつくり、調査の準備をする。	○	○			観察 ノート
II 2	・資料の収集・調査を行い、発表する内容を決め、伝える。		○		○	観察 ノート
II 3	・ポスターを制作し、発表の準備をする。		○	○		観察 グループワーク ノート
IV	4・ポスターセッションについて考える。		○		○	記録 ノート
	5・ポスターセッションの学習モデルを用いた学習。					
	6・ポスターセッションを行う。	○	○			
7						

(4) 本時(本時 IV-5)の目標と評価

①本時の目標

学習モデルを通して、資料を用いながら、発表したり、質問を受けたりして交換するポスターセッションの方法と工夫について知り、その意義について考えることができる。【話すこと・聞くこと】

②評価規準・評価基準

【国語への関心・意欲・態度】

- ①話題について、表現を工夫して話そうとし、相手の立場や考えを尊重して聞き取ろうとしている。
- A 話題について自分の表現を工夫して話そうとし、相手の立場を尊重して聞き取ろうとしている。
- B 話題について話そうとし、相手の話題を聞き取ろうとしている。
- C 話題について話そうとしている。

【話す・聞く能力】

①ポスターを工夫して作成するとともに、聞き手を意識しながら説明し、それをもとに交換する。

- A ポスターを工夫して作成し、聞き手を意識して説明することができる。それをもとに話題を展開できる。
- B ポスターを工夫して作成し、説明することができる。ポスターと説明について、質疑応答ができる。
- C ポスターを作成し、説明することができる。ポスターについて、質疑応答ができる。

②自らの表現をとらえ直し時味するとともに、相手の表現の工夫を理解する。

- A 自らの表現をとらえ直し、時味し、相手の表現の工夫を理解する。
- B 自らの表現を工夫し、相手の表現の工夫を知る。
- C 自らの表現を工夫する。

【言語についての知識・理解・技能】

③説明をするとき、多様な表現様式や展開、文の成分の順序などについて考えながら話したり聞いたりしている。

- A 説明をするとき、多様な表現様式や展開、文の成分の順序などについて考えながら話したり聞いたりしている。
- B 事前に、多様な表現様式や展開、文の成分の順序などについて準備して話したり聞いたりしている。
- C 多様な表現様式や展開、文の成分の順序などについて知ったうえで、話したり聞いたりしている。

(5) 授業計画 (本時 IV-5)

学習内容・学習活動	習得上の留意点(○)	評価基準	評価方法
<p>導入：振り返り</p> <p>1. F.S.T. (振り返りスピーチタイム) (前時を振り返って)</p> <p>2. 本時の学習課題をつかむ。</p> <p>3. 本時の発表するグループを確認する。</p>	<p>○前時の授業について振り返るスピーチを行い、本時の学習課題を明確にする。</p> <p>○思考力、表現力の育成。</p> <p>○評価基準・基準提示</p>	<p>○話題について、表現を工夫して話そうとし、相手の立場や考えを考慮して的確に聞き取ろうとしている。</p> <p>【田舎への関心・意欲・態度】</p>	<p>・発表</p>
<p>展開：実践</p> <p>4. 学習モデルグループによるポスターセッションを行う。</p>	<p>基本的な流れ PR:15秒 発表:3分 交換:4分</p> <p>○適切で明確な発表ができるように支援や見届けをする。</p>	<p>○ポスターを工夫して作成するとともに、聞き手を意識しながら説明し、それをもとに交換しようとする。</p> <p>【話す・聞く能力】</p>	<p>・発表 ・自己評価 ・相互評価 ・ノート ・評価書</p>
<p>A層への指導 モデルグループがポスターセッションで実践の意義を学ぶ → 評価基準A段階の具体的指導</p> <p>B層への指導 モデルグループでポスターセッションの意義、工夫を学ぶ → 評価基準B→A段階への具体的指導</p> <p>C層への指導 モデルグループからポスターセッションを学ぶ → 評価基準C→B段階への具体的指導</p>			
<p>5. 学習モデルをもとに、ポスターセッションの工夫、意義について学習、評価活動を行う。</p> <p>まとめ：振り返り</p> <p>5. ポスターセッションについて気づいたことを書く。</p> <p>6. F.M.T. (振り返りまとめタイム) (授業を振り返って)</p>	<p>○モデルによるポスターセッションの中で、指導、支援を行い、同時に聞くことの指導を行う。</p> <p>○ポスターセッションについて、発表内容、発表の仕方などについての意見、感想をまとめる。</p> <p>○本時の授業全体についてまとめ、意見、感想、評価を記述する。</p>	<p>○説明をするとき、多様な表現様式や展開、文の成分の順序などについて考えながら話したり聞いたりしている。</p> <p>【言語事項】</p> <p>○自らの表現をとらえ直し時味するとともに、相手の表現の工夫を理解しようとする。</p> <p>【話す・聞く能力】</p>	<p>・ノート</p>

この実践例を見ても明らかのように、学習指導計画の中に評価の観点、評価規準・基準が明確に示されている。これによって、教師は評価を意識した指導を展開することになる。それは、評定を意識した総括的評価ではなく、形成的評価である。「指導と評価の一体化」をめざし、学習者の学習目標の達成状況を把握しながら授業を行っているのである。

本実践は、教師が評価を媒介にし、学習者と学力形成のための合意形成を図る実践として行ったものである。評価規準・基準を学習者に事前提示し、何をどこまですればよいのかという見通しを持たせて学習活動を展開した。詳細は、中国四国教育学会『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第49巻（2003）に掲載している。

4. 「絶対評価」の導入による現在までの成果と課題

① 「絶対評価」導入による成果

①教師の指導の観点、目標が明確になると同時に、生徒自身も何をどこまでどのように勉強して行けばよいかが明確になる。

②生徒の実態に合わせて基準を設定できる。そして、そのことにより生徒の「学力」の学習状況、定着状況を把握しやすい。

③「学力」のどの観点が満足できており、どの観点が不十分であるかが明確になる。

④観点ごとの定着状況がA、B、C段階で表されることで

生徒の学習状況が明らかになり、特にC段階の生徒への指導の手だてを具体的に考えていくことができる。

⑤通知表をもとに、教師、生徒、保護者で次への課題（努力目標）を具体的に設定することができる。教師の説明責任が強くなり、個に応じた指導が一層可能となる。

② 「絶対評価」導入による課題

①高校入試で「相対評価」が扱われる可能性がまだ残っており、保護者、生徒の関心は、「相対評価」にまだ傾いている。保護者の理解に時間がかかる。

②学校ごと、教師ごとに評価の基準の設定の仕方が異なる可能性があり、「絶対評価」が入試で扱われても不公平になる危険性がある。学校同士、教師同士の連携、研修と意識統一が重要である。

③観点別評価でCをつけた生徒への手だてをしつかりしていかなければならないと同時に、Aをつけた生徒への発展的な学習をどうするか。個に応じた指導が一層必要とされる。

④ペーパーテストなどにおける「読むこと」と「書くこと」の関連する（クロスする）問題などを、どのように評価していくのか。また、そのような「総合問題」は必要なのか。

⑤一つの目標として表された「学力」でさえも、複数の「学力」の要素から構成されている。よって、観点別で、目

標ごとで評価していくことには限界がある。

⑥ 「国語への関心・意欲・態度」はどう評価するのかが教師によって異なり、曖昧である。

⑦ 評価についての教師の説明責任が問われ、個人データの蓄積と評価方法などの開示が必要となる。教師の評価力の客観性、信頼性が一層問われる。

5. おわりに

「絶対評価」の導入により、これまで「相対評価」で対応してきた中学校の現場は大きく意識変革を迫られていると言える。今後、学校にマネージメントサイクル (Plan → Do → Check → Action) を導入することで、絶えず評価の改善を行いながら、「評価力」を高めていかななくてはならない。そのときに、評価の目的が、「すべての生徒が授業に生き生きと取り組むとともに、確かな学力を身につけていくためである」ことを忘れず、授業の改善を常に行っていくたいと考えている。

また、忠海中学校では、学力向上フロンティアスクールとして、「教科の『基礎・基本』を豊かに生かす教育実践」「思考力」「表現力」を高めるための個に応じた指導方法・指導体制の工夫改善」というテーマで全校で組織的な研究活動を行っている。本校の教育研究を進めるうえでも、評価観の意識変革は欠かせないのである。

(広島県竹原市立忠海中学校)